

『お先にどうぞ』が結ぶ心と心

宮城県 仙台二華中学校 二年 鈴木 美紀

私は、「お先にどうぞ」という言葉が持つ爽やかな感触が好きだ。言う場合も言われる場合も、そばで誰かのやり取りを見聞きした場合も、である。何故好きなのかと言うと、知っている者同士はもちろん、見知らぬ者同士の心でさえ、一瞬で結ぶことができるからだ。

そう、あれは震災直後のことだ。私は、母と兄と妹と買い物に出かけた。普段なら、母は障害のある兄と妹を連れての買い物は極力避けている。迷惑がかかる、周りの視線が気になるなどの理由だ。しかし、この日は頼みの綱の姉がいない。被災したばかりで私と兄と妹だけで留守番はさせられないと、母は私たちを連れて買い物に行くことにしたので。

スーパーはまだ平常営業とはいかないが、並ばないで店内に入れるようになった。しかし、品数が十分に入っていない状況なので、買い溜めする客が多い。そのため、かなり混んでいる。

案の定というかやはりというか、兄はこの騒々しさを嫌って騒ぎ始めた。妹は興奮して奇声を上げている。ちなみに兄は重い自閉症児、妹は発達障害児だ。母と私が二人をいくらなだめても、気を紛らわせても静かにならない。震災で周囲も苛立っている時だ。多くの人が冷ややかな態度で通り過ぎていく。ああ、これがいつも母がこぼしている「肩身が狭い」か。母は居た堪れなくなり、最低限のモノだけ買って帰ると言う。そして、

「ごめん、お母さんたちはあっちで待っているから、美紀ひとりで買ってきて」
母は私に買い物カゴとお金を託すと、レジの反対側に兄と妹を連れて移動した。

私は、母たちが私の元を去ってすぐ、一番早そうなレジを見つけて並んだ。それでも四人待ち、まあ仕方ない。そんな風に関き直って順番を待っていると、私の前に並んでいた知らないおばさんが、後ろを振り向いてこう言った。

「お姉ちゃん、お先にどうぞ」
順番を譲ってくれたのだ。私は正直驚いた。兄と妹といっしょにいて、「うるさい」と冷たい視線を投げかけられたり、「しつげが悪い」と怒られたりしたことはあっても、こんなに自然にやさしい手を差し伸べてくれた人などいなかったからだ。まして、この震災で心が折れそうになっている時だ。

状況がすぐのみ込めず、きよとんとしていると、おばさんは私の返事を待たずに

さっと私の背後に移った。私はようやく我に返り、

「あ、ありがとうございます」

というひと言をしばらく出すだけでいっぱいだった。

その様子を見ていた母は、おばさんのレジを待って何度も

「ありがとうございます」

とお礼を言った。おばさんは、

「いえいえ、私と入れ替わっただけですから大した事はしていませんよ」

と笑顔で答えた。

帰り道、私は母といつまでもあのおばさんのことを話していた。それほど、おばさんのさりげない親切が心に響いたからだ。こんなに簡単な日本語なのに、こんなにも心をポカポカにするなんて、私もおばさんのように、「お先にどうぞ」と声を掛けられる温かい人になりたいと思った。「お先にどうぞ」と言える心の余裕を持ちたいと思ったのだ。

初対面の人になんて遠慮なく使える「お先にどうぞ」。張りつめた空気だった一気に和む「お先にどうぞ」。もちろん、お先させてもらう方は嬉しいが、心が通じて「ありがとう」と返されれば、お先させた方だって嬉しい。こんな素敵な言葉が身近に存在するなんて、日本語って案外おしゃれだなんて思う。

私と母は「私たちも人を思いやり、譲り合って生きて行こうね」と何度も繰り返して同じことを言っていた。恥ずかしがり屋なので、他人に自分から声を掛ける勇氣などない私だが、「お先にどうぞ」なら構えることなく口にできそうだ。

そう、一期一会の人との心も結ぶことができる「お先にどうぞ」。私は、この言葉を常に心の片隅に置き大切に使っていこうと思う。